

思い出情報を用いたコミュニケーション支援

思い出の重要性

災害発生後に被害にあった写真や思い出の品を回収し、元の状態に戻して被災者に返すという活動がある。普段意識することは少ないが、**思い出と、思い出を想起するための思い出の品は人にとってとても大切なものである。**

思い出は人の記憶のうち長期記憶の中のエピソード記憶に分類される。思い出は**個人が体験した経験の主観的な記憶で**

あり、物語として一定のまとまりがあるものとされている。思い出は人の基盤であり、無意識に思い出を想起することで、人は自分自身を確認する。

思い出を想起する、思い出を話す効果として以下のようなものが挙げられる。

- ・ 気持ちが落ち着く
- ・ 自己を確認する

- ・ コミュニケーションがとりやすくなる
- ・ 類似する思い出をもつ相手に親密さを感じる

本研究室では、これらの思い出がもつ効果に着目し、組織などの**コミュニティ内でのコミュニケーション支援や、認知症療法（回想法）の支援、知識継承**などに取り組んでいる。

思い出工学とは



図1：思い出情報のデジタル化

スマートフォンなどのデジタル機器が高性能化するにつれて、**思い出情報のデジタル化**が急速に進み、膨大な量の思い出情報がデジタルデータとして保管されている。しかし一方で、これらの思い出情報が十分に活用されていない現状がある。

思い出工学とは、思い出情報を収集、

管理し、工学的に応用する取り組みである。人の行為の客観的なログを収集するライフログとは異なり、思い出は人の主観的な物語の記憶である。そのため、同じ時間に同じ空間にいたとしても人によって思い出は異なる。このような個人が有する思い出をどのように収集し、活用するかが課題である。

コミュニケーション支援での取り組み

地域コミュニケーション支援

近所付き合いの希薄化が問題視されているが、生活スタイルの多様化や世代間、地域内のコミュニケーションの減少が一つの原因であると言われている。この問題に対し、**場に思い出を蓄積**することによるコミュニケーション支援を提案した。その場にいる人がその場所に関する思い出についてやり取りを行う（図2）。日々そこを通る人、周辺に住む人であれば共感できる話題であるため、コミュニケーションが活性化されることを示した。



図2：場所に思い出を蓄積するコミュニケーション支援システム

家族間コミュニケーション支援

家族との団らんの場とは、1か所に家族が集まり同じものに共感をする場である。団らんの場でのコミュニケーションを促すために、思い出の写真をただ閲覧するだけでなく、**思い出写真を並べて整理する**という作業を参加者全員で行う協創空間を提案している。図3はランダムに配置された写真を時系列に画面の下部に並べるためのシステムである。並べるという作業を通じて、思い出が想起されコミュニケーションが促される。



図3：団らんの場での思い出写真を用いたコミュニケーション支援

色を介した思い出情報のやりとり

思い出が想起される時、明確なキーワードではなく過去に見た景色のイメージが想起されたり、関連する思い出が芋づる式に想起される場合が多い。そのため、思い出情報と利用者が想起した思い出を関連付ける場合に、キーワードなどの言葉を利用することは難しい。そこで本研究室では、思い出情報と色の関連を分析し、想起された思い出の印象を表す色で思い出情報を扱う取り組みを行っている（図4）。



図4：思い出の印象を表す色に触れることで対応する思い出写真が出力される